midorinodam.jp

NPO法人
緑のダム
北相模

August 2013 No.356-357

８月号の１枚：嵐山のコミスジ

［巻頭言］ 変な人たち？・・・当会の会員たち

今までと違った新しい方法を提案する人々

遠くから、例えば千葉からとか埼玉からとか交通費を使って参加費を払って相模湖の森の整備のために汗を流す事は、経済一辺倒の今の世相からして有り得ない事です。1960年に米国の経済学者P・ドラッカーが「21世紀は、無償で社会貢献に汗を流す人々が出て来て、新しい社会システムが生まれる」と予言していました。当会は、その間只中にいます。

ここで言う「変な人」とは「自分の欲より社会の事、今の事より将来の事、柔軟で真剣に問題解決に向かって、勇気を持って勇敢に解決策を提言・行動しようとする、今までと違った新しい方法を提案する人々」です。戦後の経済万能の思想で生きてきた人々には、余計な事であり邪魔な事・人々です。ですから間々、妨害・対立があります。良かれと善意・無償・むしろ持ち出しで、より良き社会のために行動しているのに妨害とは不本意ですが、妨害に会うと言うことを良く観察すれば、そこに解決すべき問題が残されている事が有りあります。本物のNPO活動とは、妨害・反対も自分の活力にしてしまう行動です。こんな人々は 「変な人」と映ります。「変な人」と言っても本人は、至極真面目に考え行動しておりむしろ「変な人」を言う人こそ〝変な人だなぁ〜〟、と感じてさえいます。唯、例えば自分だけが正しいと思いこんでいる人もいます。これも駄目です。

当会の毎月の定例活動日には、80〜100人近くの人々が集まります。特に、若い人、中・高・大学生が70%を占めており、この若者たちが思いもかけない事をしたり、言い出したりします。彼らは昨年あたりから「自分たちで国際認証も森つくりが出来ないかなぁ」と言い出しました。エッ！・・です。彼らは「変な人」ではありません。極めて真面目な若者達です。

石村　黄仁（本会、代表理事）

今月の定例活動

2013.08

8月 4日（第一日曜日）：
小原本陣の森/森林整備、担い手育成、技術向上。
持続的森林経営：弁当持参。参加費：４００円

8月18日（第三日曜日）：
相模湖・嵐山の森/里山交流、多様な森林活動。
主食・自分のお椀・箸・飲料水は持参。参加費：４００円

FSC
www.fsc.org
FSC® C006376
責任ある森林管理のマーク

[定例活動]小原本陣の森

7月2日（第一日曜日）

少し短めの梅雨が明けたかと思ったら、ここ連日の夏の暑さにこれからが思いやられるようです。
今回の小原での定例活動では、植生調査を主な仕事としている篠原さんを迎え入れ、他ForestNova☆の新1年生も加え、計16名で作業をしました。また、ForestNova☆で今まで毎月の定例活動の計画や連絡等を行っていた“森をつくるリーダー”の役割が3年の淺野雅樹先輩から新しく2年の山田和彦君に引き継がれて初めての定例活動を行いました。その山田君にリーダーの役割が引き継がれた初めての作業では、林内の径路整備をする班と製材加工を行う班に分かれ作業を行いました。

まず、林内の径路整備の班ですが、1年生を中心としたグループとその他の上級生のグループに分かれ作業を行いました。午前中は1年生中心のグループでは、緑のダムの川田さんから小原の森の話や径路についての知識、枝打ちのやり方、小原にある樹木や植物の説明、さらに藤というツル性の植物の撤去方法まで教えてもらいました。また、上級生のグループでは、社会人の篠原さんから様々な植物の特徴や名前の由来等を教えてもらいながら整備を行いました。午後には2グループが合流し、林内の径路の補修や間伐を行いました。

また、下の拠点で製材加工を行っていた班は、午前中にはForestNova☆で使う材の加工を行っていました。その加工では準備不足があり少々失敗をしてしまい、上手に材をとることができませんでした。また午後の作業では、緑のダムの松尾さんが先日加工した約四メートルの材を更に加工したのですが、こちらも上手くいかず製材加工を行った班は課題点が多く見える活動となってしまいました。なので、次回の定例活動の際は当日の作業で使う必要な物品の用意や事前に計画をたて、その計画に沿った活動をしたいと思います。

今回の小原での定例活動では、主に1年生に対して知識を得てもらうということで様々な話を聞くことができ、これからの森づくりに対して、一つ一つに意味があるということが実感できたと思います。これからの活動では、その得られた知識を新年生と共に活かしつつ、より良い森をつくっていきたいと思います。

釜谷　優太（ForestNova）

[定例活動]相模湖嵐山の森

7月21日（第三日曜日）

ヤマユリ、ノカンゾウ、オオバギボウシ…。春の楚々とした花とはうって変わり、大きくて目立つ花々が夏の陽を受け、嵐山の森に彩りを添えている。

参加者９５名。このところ少ない時でも７０名を下らない。その過半が若者たちというのもいつものことである。今回は久しぶりに早稲田大学・金山教室の学生が加わる。男女それぞれ２名ずつだが、うち３名はレスリング部、１名はフェンシング部という筋金入りの体育会系。重量級と思われる大柄な男子は全日本クラスで、かつて「霊長類最強」と呼ばれたロシアのアレキサンドル・カレリン（伝説のレスリング選手です）に先日会ったそうである。材運びが予定されていることもあり、頼もしいことこの上なし。そうそう、川田さんや私の所属する全国森林インストラクター神奈川会（ＪＦＩＫ）からも鈴木哲平さんが参加。鈴木さんは現在、横須賀三浦地域の林業普及指導員。担当地域には森林組合もなければ、林業事業自体もなく、そんな中で自分に何ができるかを探っている状況なのだそうである。

さて、今日は材降ろし、皮むきを初め、木工作業、間伐体験、植生調査、生垣づくり・剪定と、いつになく盛り沢山のメニューが揃っている。老若男女、各グループ入り混じっての共同作業となる気配だ。

いつもは写真係の私もこの日ばかりはさすがにのんびりしている訳にはいかず、さっそく金山教室の学生と森を歩くことに。木や森の大切さを中心にお話ししたのだが、途中、金山先生から「これの説明をしてください」との要望が。見ればシダ植物ではないか。ちょっと嬉しくなってその生態と進化というマニアック

な領域にまで足を踏み込むことになってしまった。果たしてよかったのだろうか？　彼らはその後、森林整備班・石井さんの指導のもと間伐体験を無事に終了。

体験学校長の斎藤さんは仮置き場用の材降ろしや皮むきの指導に大わらわ。高井戸中の生徒が大勢で「なみすけの森」から運んできた材を森林整備班が玉切りし、皆で皮をむく。今の時期が皮むきには最適らしい。先述した鈴木さんもこの作業に加わっている模様。

お昼には冷汁が待っていた。作業でほてった参加者の身体をねぎらおうと石村夫人がご自宅から大量の氷を持参して、かどや食堂のスープを冷やしてくださった。いつもながら頭がさがる。

午後からはフォレストノバが製材を始めたため、いつもは人の少ない「MOMA工房」周辺が俄然活気を帯びてきた。これに高井戸中が合流。傍らではノバや早稲田の学生たちがせっせと皮むき。賑やかにならない訳がない。

高井戸中の別動隊と望星高校は「望星の森」の植生調査。１m四方の区画（コドラート）を上、中、下段の３箇所にそれぞれ３つずつ設け、図鑑を片手に同定を行う。だが、慣れないと難しいのがこの作業。「望星の森植物図鑑」には載っていないものもあるため、私も少しだけ協力。苦労はしたものの終礼までには完了したようである。

予想通り、各グループが入り混じることになった今日の活動。いつも以上に熱気を感じたのは私だけではないだろう。やはり嵐山は「里山交流の場」なのである。

内野　郁夫（本会、理事）

[報告１]
さがみはら環境まつり
森モリ講演会 報告

6月30日

森モリ講演会「津久井産材の活用を考える」では、基調講演として、社会資本の森づくり（講師：箕輪光博氏、公益社会法人大日本山林会会長）より、「空気・水を供給してくれる森林は、全ての生態系の生命を保証してくれる社会資本だ。相模原市は、大都市にして58％もの森林が有る。都市インフラも充実している。相模原市は、地の利（人・モノ・金・情報の集積地）、情報の集積地（完成間近の圏央道、JRリニア新線橋本駅）森林資源生産地と大消費地のジョイント地、先端技術の集積地（JAXA、産業創造センター、市内に9校の大学）に加えインフラ（交通・福祉・医療・教育等インフラ、国民福祉、経済システム）が進んでいる。」とのこと。

おふたり目の酒井秀夫氏（東京大学・大学院生命化学研究科森林利用学研究室教授）からは、北欧林業先進国の豊富な各種データを例に日本林業のあり方を示唆。問題提起として、古橋祐一氏（橋本に本社を置く相陽建設・代表取締役）から、「何故、日本で林業システムが出来ないか」、「体質が古い」（先生方の回答）「自然への対応はどうか」「配慮が欠如している」。「地域材が出ない」「インフラ（森林情報、路網等）が整備されていない」。「誰の森から材を出すか」、「境界線の不明確、不在地主等、問題が山積で解決が必要だ。」とのディスカッションがあった。

最後に、天竜材流域から金原利幸氏（金原明善治山治水財団　理事長）から「先ず、行動に移す事、試行錯誤から回答を編み出す。理論も必要だが実践有ってこそ。」とのお話があった。

出演４名の方々のお話は整然として分かり易く、地域材の方向性を示したと思う。

石村　黄仁（本会、代表理事）

[報告２] 連携協力に関する包括協定、調印式

さがみはら環境まつりの会場、ミウィ橋本のインナーガーデンを舞台に麻布大学とNPO法人緑のダム 北相模の間で包括協定に関する調印式が行われました。

今回の締結では麻布大学の学生を中心とするForest Novaという学生連合が数年来、緑のダムと 相模湖の森林整備や環境教育をはじめ多くの地域貢献活動を協働してきた実績が大きな契機となったことは間違いありません。ノバの学生たちの旺盛なボランティア精神と生物や森林に寄せる誠実な共生感覚は確かに大きな可能性を感じ

させるものですが、そうした彼らの真摯な思いと実践を確実に受け止めていただいている緑のダムの方たちの度量の深さも感嘆に値します。
相模原市に教育・研究の拠点を置く麻布大学にとって、市民レベルの草の根による市民活動と本格的な連携をはかることは、大学が地域社会の一員として地域活性化の一翼を担うとともに、大きな潜在力を持つ学生たちに真に社会に貢献できる人材育成の機会を与えられることでしょう。自分は教員職の傍ら、熱帯林行動ネットワーク(JATAN)という森林関係のNGOで活動しています。EU、米国、豪州では、違法伐採問題の水際対策で政府主導の強硬な木材規制をスタートさせています。違法材問題ではいまや先進国社会で唯一日本のみが旧態依然の不徹底な規制に甘んじていています。
緑のダムが取り組む「森林・林業の復権」に地域の教育機関と市民団体の協働が少しでも一石を投じ波紋となって広がればよいと願っていますし、そのための助力は惜しまないつもりです。足元を固めて国際的に後れを取っていると地球の森林破壊阻止に向かいたいと思います。

原田　公（本会会員、
麻布大学国際コミュニケーション
研究室教員）

[報告３]Forest　Novaの活動報告

　さて、去る6月30日に私たちForestNova☆はミウイ橋本で行われた、第9回さがみはら環境まつりに参加しました。
　今回ForestNova☆は、相模原の森に関するパネル展示、間伐材でのストラップ作り、津久井郡森林組合の手伝いを行いました。企画とはまた別に緑のダムと麻布大学との学術交流協定締結の調印式も行いました。
　今回行ったパネル展示では相模原市内の5カ所の森や、森と関われる場所、もしくは森を知ることができる場所を紹介しました。今回の展示を通して、私たちが普段活動をしている嵐山を含め相模原にある森を知ってもらい更に、現地に行ってもらいたいと考えています。
　間伐材でのストラップ作りでは私たちが活動している嵐山で間伐した木材を使い体験されているお客さんに木の良さを感じてもらうために行いました。「木の良さ」というのは、個人的意見なのですが間伐、加工といった風に木が形を変えながらもその木の良さが変わっていく事をお客さんが理解し、感じ取ってもらえるよう努力しました。またそれと同時に、森林組合の人たちのお手伝いで、木の鉛筆作りも行いました。
　このイベントを通して普段森に行く機会が少ない人たちが少しでも森に行きたくなるような活動が出来たのではないかと思います。今後も森の良さ、木の良さを伝えていきたいと思います。

白井 卓哉（Forest Nova）

[報告４]
森を伝える人になる

　先日の相模原環境まつりの際、さがまち環境学習プログラムコンテスト（通称SUSコン）というものが行われました。これは、相模原・町田地域の明日(将来)を持続可能なものにするための環境学習プログラムを考え、ポスターを作成し、発表するというものです。
　ForestNova☆からも、森を身近に感じてもらえるようなプログラムを考え、エントリーしました。内容は、森の生き物が、土を作り、その土が水をきれいにしたり、蓄えたりして、自分たちが使う水になるということを、遊びや実験を通して、子供たちに伝えるというものです。
　当日は、そのプログラムのポスターを展示し、また、審査員の方の前で5分間の発表と質疑応答を行い

ました。質疑応答では、鋭い意見や質問をしていただきましたが、Forest Nova☆皆で話し合って考えたものなので、しっかりと答えることができ、さらに、自分たちでは考えが至らなかった部分は、しっかりと吸収することができました。

今年度は7組がSUSコンに参加し、そのうち、会場賞2チームと優秀賞が選考されました。会場賞は、当日ポスターを見て来場者が票を入れていくもので、麻布大学のサークルであるあざおね社中のプログラムと、麻布大学の教職課程の2年生が考えたプログラムが選ばれました。そして、優秀賞は3人の審査員の審議によって決まるのですが、なんと満場一致でForestNova☆が選ばれました。選ばれた理由として企画の流れや一貫性を評価していただきました。

先輩の代から何度か環境教育を行ってきましたが、改めて外部の人から評価・指摘されることは今までありませんでした。しかし、今回の受賞で私たちがやっていることは間違いじゃなかったな、と確信することができました。

これからも、今回戴いた意見や評価を活かして、さらに楽しいプログラムを考えていきたいと思います。そして、子供だけでなく大人にも森を身近に感じられるように、森が好きになるように、森をもっと知りたくなるような、そんなプログラムを実施していきたいと思います。

望月　亜佑子（Forest Nova）

[報告４]積み木で２つの「小倉橋」を制作

今回のイベントでは、相模原市にある新旧小倉橋制作のリクエストをいただきました。橋自体を見たことがある生徒はいませんでしたが、ネット上の地図などから基本的な構造を理解し、まずは縮尺を決める作業から行いました。旧小倉橋の小さなアーチのサイズが決まり、旧小倉橋はその４倍、そこから新小倉橋のイメージができました。ところが、新小倉橋の大きなアーチはどうしても積み木だけでは支えきれず、前回のはやぶさ制作同様積み木と同サイズの角材が左右のフレームとして入ってしまいました。しかし、ご来場、見学していただいた方からは、口々に小倉橋に見える、と言っていただき、生徒たちも安心した様子でした。実は今回、時間的な制約から初めて試作の完成を見ないまま当日を迎えるという挑戦でした。しかし、いつもの持ち前の「根性」で完成させるあたりはさすが、と思うしかありませんでした。ちなみに完成後は、橋の上を林業車両が通るという本会のグリーンハブシティをイメージした小細工もなされていて、講演後にお寄りいただいた酒井先生からも笑っていただけました。

宮村　連理（本会、理事）

[事務局からのお知らせ、お願い]

今回のさがみはら環境まつりの様子は本会Webの定例活動報告でも映像を用いてご覧頂けます。そちらもぜひご覧ください。

http://blog.midorinodam.jp

[イベント告知]自然・文化がある幸せを次世代へ：森林と水と文化・まなびのエコステーション

８月１４日水曜から２４日土曜まで、国連大1F地球環境パートナーシッププラザにて上記イベントを開催します。本会に加え、上智大学アジア人材養成研究センター、NPO織の海道実行委員会の共催、協力：杉並区立高井戸中学校地球環境部、宮古島市で行います。本会の積み木を使用したアンコールワットを参加型でつくるイベント，活動内容の展示に加え、１７日土曜日には講演内容をその場にアートにしていくビジュアルミニッツ講演（上智大阿部さん、本会宮村、アートファシリテーター福井さん）、２４日土曜日には、上智大遠藤先生の講演も予定しています。ぜひお越し下さい。

イベント詳細はこちらから

地球環境パートナーシッププラザ
GEOC、多目的スペースイベント
http://www.geoc.jp/
event_seminar/multi/detail97

参加にあたって：

初参加者は、9時15分までにJR相模湖駅前集合してください。服装、持ち物については、汚れても良い服装、着替え、滑らない靴　成るべく皮製手袋、万一の怪我に備えて保険証、飲料水、主食；自分の食器(お椀・お箸)

危機管理・救急対応：

危険管理・救急体制・森林ボランテイア保険の準備の他、会として可能な限りの体制を敷いていますが「怪我・事故は、自己責任」です。

会員コーナー

●会員のコーナーでは、皆さんの自由なご意見やご提案をお願いいたします。下記の専用メールアドレスか、事務局FAXまでご連絡ください。また、こちらのコーナーへの投稿や写真の提供もお待ちしております。

●通帳からですと振り込み手数料が掛かりません。
領収書はゆうちょ銀行等の発行する領収書をご利用下さい。
また、新規入会の方は、住所、電話番号を事務局にお知らせください。
振込の際は局の振込用紙に記号、番号を記載し、振込者の情報を記入して、機械操作にてお振り込みいただけると助かります。

世田谷郵便局　（記号）10000-（番号）65791651

NPO法人
緑のダム北相模

名称：特定非営利活動法人　緑のダム北相模
事務局：154-0023　東京都世田谷区若林３－３５－９
発行人：NPO緑のダム北相模　事務局 Tel&Fax　03－3411－1636
ＵＲＬ：http//www.midorinodam.jp
E-mail：info●midorinodam.jp　●を＠に変更して使用してください
corner●midorinodam.jp　会員コーナー専用アドレス

急がず、無理せず、楽しく、休まず、ボチボチと・・。
そして、沢山の参加で森は、良くなる。
（台風の日は勉強会開催。１６年間、一日も休まず“継続は力”。）

協働団体：セブン-イレブン記念財団、相模原市（市民協働推進課）、東海大学付属望星高等学校、生命の森宣言・東京
支援団体：WWF JAPAN、イオン財団、市民社会チャレンジ基金、神奈川県建具協同組合、JFEメカニカル、東急コミュニティ、マルモ出版